

「情報処理学会論文誌：教育とコンピュータ」の編集にあたって

奥村 晴彦^{1,a)}

1. 第2号刊行にあたって

お待たせしました。情報処理学会論文誌「教育とコンピュータ」(*IPSJ Transactions on Computers and Education*) 第2号をお届けします。

本誌の目的や特徴はすでに第1号に角田編集委員長と竹村編集副委員長が書かれています。情報処理学会で教育系トランザクションを出すべしという話はずいぶん前からありましたが、準備委員会ができたのは2012年で、当時のコンピュータと教育研究会(CE研)角田主査と教育学習支援情報システム研究会(CLE研)竹村主査が編集委員長・副委員長に就任され、何度も会議を開いて方向性を検討してきました。教育系(小中高校の先生も含む)・センター系の研究者にも魅力的な論文発表の場とすること、査読を柔軟にして著者照会を何度でも回せるようにすることなどが議論されました。柔軟な運用を可能にするため、投稿・査読システムはMoodleをカスタマイズして自前で準備しました。こうして、投稿受付を始めることができたのが2014年の2月でした。

2014年中に投稿された論文は、招待論文3編を含めて27編を数えました。この数からすれば大成功といってよいと思います。ただ、第2号の時点で(招待論文を含めて)6編しか掲載できていません。まだたくさんの論文が査読中です。次年度からは編集委員を増強して、より迅速な処理を目指します。ご投稿をお待ちしております。

なお、投稿用サイト(<http://oku.edu.mie-u.ac.jp/tce/>)には、投稿を考えておられるかたがざっくばらんに質問できるフォーラムも用意してありますので、ぜひお立ち寄りください。

2. 本号掲載論文の紹介

本号では招待論文1編を含む3編の論文を掲載しています：

- 招待論文「識字教育としてのプログラミング」は、なぜプログラミング教育を行うべきか、なぜプログラミ

ング「言語」教育がうまくいかないかを論じています。著者は1994～1997年度のCE研主査で、本論文でも紹介されている日本語語順のSqueak拡張「ことだま on Squeak」は著者の研究室で開発されました。

- 「コミュニケーションスキル獲得を促すソフトウェア技術者教育の試行」では、従来の課題解決型学習(PBL)と異なり、ソフトの完成を主要な目標とせず、コミュニケーションスキルを獲得することに主眼を置くというたいへんユニークなソフトウェア技術者教育を実践し、結果を評価しています。
- 「小学生に対するアンプラグドコンピュータサイエンス指導プログラムの実践と評価」は、CE研123回研究発表会(2014年2月8日)の発表に基づいた研究会推薦論文です。Computer Science Unplugged(<http://csunplugged.org>)とは、計算機を使わずに計算機科学の考え方を子どもたちに教える運動で、本論文の第2著者の翻訳で『コンピュータを使わない情報教育：アンプラグドコンピュータサイエンス』(2007)という本が出ています。著者たちは、日本の小学校でこれを実践し、その効果を緻密に検証しています。

¹ 三重大学

Mie University, Tsu, Mie 514-8507, Japan

a) okumura@okumuralab.org